

MIMAZAWAGAWASAGAN

三間沢川左岸遺跡(I)

平安時代集落址の緊急発掘調査概報



松本市教育委員会

はじめに

松本市和田西原の一帯は以前から土器類・須恵器・灰釉陶器等が散布してあり周知の遺跡として知られていたが、昭和30年代に開田事業が行われ、遺跡はほとんど破壊されたものと考えられていた。その後、同地には松本市により臨空工業団地建設が計画され、昭和61年12月に工事開始に伴う土取りの際、多量の遺物とともにいくつかの竪穴住居址が確認された。このため松本市教育委員会では関係機関と協議し、まず試掘調査を行い、次いで緊急発掘調査を実施することとした。調査範囲は工業団地の調整池、処理場、沈砂池予定地で、先に土取りをした場所のうち約7500m²である。

調査は昭和62年5月から7月にかけて行われ、以下に示す多くの成果が得られたわけであるが、一方、遺跡は更に西側へ広がっていることが判明したので、今後も調査を継続することとした。本書は今回の調査概要について報告するもので継続調査終了後に本報告を行いたい。



遺跡の立地・環境

本遺跡は松本市の西南、山形村に接する位置にあり、標高は約642mの緩く東北に傾斜する耕作地帯で、現況は水田である。遺跡はその名の示すように三間沢川左岸にある。三間沢川は山形村西方の清水寺下辺より発して、村内東方で唐沢川と合流し、松本市神林川西で鍋川と合する。通常は水の少ない川であるが、降雨時には山形村の水を一つに集めて流下するため、河床を掘下げ、川幅10mあまりに対して深さは3~4mと深い。三間沢川・唐沢川等の小河川は梓川・鍋川の扇状地を浸食し、各所に小規模な河岸段丘をつくっている。土壌は表土（耕作土）は黒褐色の粒子の細かい土で、春先には塵埃となって巻き上がる光景がよく見られる。第2層は乗鞍岳・御岳などの噴火によるローム層であるが、場所によってはローム層中に小礫層が含まれるものもある。ローム層は厚く数メートルに及ぶ。

周辺の遺跡については、西側の山形村北西に縄文前期、弥生後期の唐沢遺跡があり、その北側の北唐沢遺跡では縄文中期土器片が多出している。それを東に下ると神明遺跡があり、縄文前期の滑石製品が出ている。更に東に下ると縄文中期を主とする三夜塚遺跡がある。三夜塚遺跡は旧唐沢川の窪地の南北両縁にあり、縄文早・中・後期、弥生後期、奈良・平安時代と幅広い時代の遺物が出土している。この三夜塚遺跡の近くには、北に波田町に統く下原、南に堀之内・北竹原、東に野尻の各遺跡があり、下原・野尻の兩遺跡からは奈良・平安時代の遺物が採集されている。本遺跡を経て東へ行くと、和田に入って中野尻・下野尻遺跡があり、これらは本遺跡の範囲に統くものである。他に太子堂からは石器が採集されている。三間沢川を渡ってすぐの右岸には縄文・奈良・平安時代の三間沢川右岸遺跡があり、更に南の松本市神林と山形村の境にあたる境窪遺跡からは弥生中期と平安時代の遺物が出土している。境窪遺跡の東側の神林開田からは縄文中期、平安時代の土器片が採集されている。鍋川を渡ると近くには遺跡がなく、奈良井川寄りになると奈良・平安時代の遺跡が多くなる。このようにしてみると、奈良・平安時代には平坦地にかなりの集落が営まれていたことが窺える。



調査地西側部分の竪穴住居址群



発掘調査の範囲 (1 : 4000 上方ガ北)

調査の成果

今回の調査では約7500m²の範囲内に、総数130棟に及ぶ堅穴住居址を主体として掘立柱建物址・土壙・溝址が発見され、平安時代の大規模な集落址であることが確認された。各遺構からは多量の土器・陶器類のほか鉄器・銅製品・石器・石製品など多種の遺物が出土している。発見された各種の遺構および遺物の概要は下表のとおりである。出土遺物から推定する各遺構の年代は、すべて9世紀中頃から10世紀中頃のほぼ1世紀間に收めることができる。

特記すべき調査所見は、遺構については、第一に大形の堅穴住居址の主柱穴と補助柱穴の配置に好例が見られること(3・4頁参照)、第二に集落全体では住居と溝との関係、あるいは住居間の配列に一定の傾向が見えること(5・6頁参照)が挙げられる。遺物では、鋳製印鑑や補修痕のある佐波理鏡の出土(9頁参照)、縁釉陶器の多いこと(7・8頁参照)が注目に値する。特に縁釉陶器は図示できないものまで含めると総数で150点余となり、同時期の他の遺跡に比べて際立った違いを見せている。また墨書き器で同一の文字「王」を記したもののが、多くの堅穴住居址から出土していることも見逃せない。

以上のような内容の今回の調査は、幾多の貴重な遺物の出土や堅穴住居・集落の構造に迫るなどの考古学上の成果に加え、古代史的にも松本平南西部の開発や更には筑摩郡・松本平の発展を探るために良好な資料をもたらす意義の大きいものであった。

現在、遺物についてはごく一部の整理が終えたのみで全体像をつかむには程遠いが、ここまで調査結果から推測すると、この平安時代の集落は並外れた数の縁釉陶器や銅製品を保有する有力な集団が約1世紀という短い期間内に、大規模かつ計画的に開発・入植し、そして去っていったものであつたと言える。集落の性格については、堅穴住居址の数に比べて掘立柱建物址が少なく規模も小さい点や、今のところ古瓦・陶瓦といつた遺物が皆無であることを考え合わせると官衙やその周辺ではないようであり、むしろ莊園的なものを想定したほうが良いのかもしれない。

遺構

堅穴住居址	130棟
掘立柱建物址	10棟
溝 址	5本
土 壙	7基
ビ ッ 特	約100基

遺 物

土器・陶器	土師器・須恵器・灰陶陶器多数、縁釉陶器約150点(小片を含む)、越州窯系青磁1点 ほとんどが堅穴住居址からの出土
鐵器・銅製品	鎌、鍔、刀子、斧、釘、釘錐車、麻皮剝具、その他器形の不明なもの等50点余、铁滓約100点
石器・石製品	帶飾り(巡方)、砥石
銅 製 品	帶飾り5点(巡方、鉢尾?)、古鏡2点(1点は富士神宝)、印鑑(方一寸の蓋鉢印)、八棱鏡、佐波理鏡、佐波理鏡を除き堅穴住居址からの出土



第55号住居址

1区中央部に位置する大型の住居。確かに正方形を呈し、南北6.4m、東西7.1mの規模をもつ。壁はいずれも40cm前後の高さを測り、床は埠山のロームを用いた堅鐵なものになっている。4つの深い主柱穴と壁際には4本配される補助柱穴をもつ。覆土中から床面にかけて土器が多く出土し、土師器のほかでも一括品が数10個体に及ぶ。これには「王」の簡書が多数見られる。また灰釉陶器や一括品を含む10数点の綠釉陶器が出土している。



第110号住居址

2区南端に位置する大型の住居。鵝卵形のプランを呈し、南北5.6m、東西6.8mの規模をもつ。壁高は40cmから60cmと高く、床は埠床でロームを用いた堅鐵なものになっている。4つの深い主柱穴のほか、壁際には礎石らしいものも見られる。覆土から床面にかけて、土師器、須恵器が多数出土。土師器の杯、壺類を主とするが須恵器の把手付きの壺、銅製の帶金具2点、石製の帶垂り1点などが特記すべき出土遺物である。



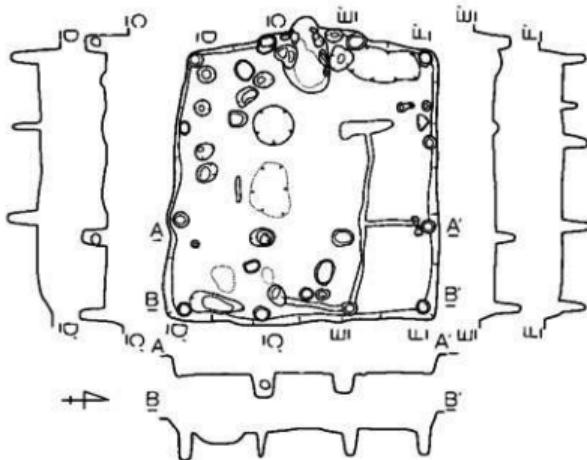
第22号住居址

1区北端東側に位置する中型住居。鵝卵長方形のプランを呈し、規模は南北5.2m、東西4.4m。第23号住居址に切られる。壁高は一様に40cm前後を越り床は程よく堅くしまりのよいロームからなる。土師器を中心とした土器が少量出土したが、とりわけ注目すべきことは、壁際より「長良私印」と読める銅製の印鑑が発見された事である。本址は、規模、構造、他の出土遺物等から見ても平均的な住居址であるにもかかわらず、このような貴重な遺物が出たことは不思議な事である。



掘立柱建物址

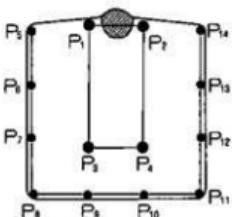
1区中央部、北部、南部に1棟づつ、2区溝4南部には7棟集中して存在した。本溝柵区域に施設数で10棟みられる。建物の平面形は方形ないしやや横行のある長方形で、柱の配置は大半が桁・梁同数で2周から1周の側柱式であり、総柱式は2軒みられるのみである。主軸方向はほとんどが南北を指し、わずかに建物址9が東に傾ける程度である。写真は建物址6(手前)、5(奥)。



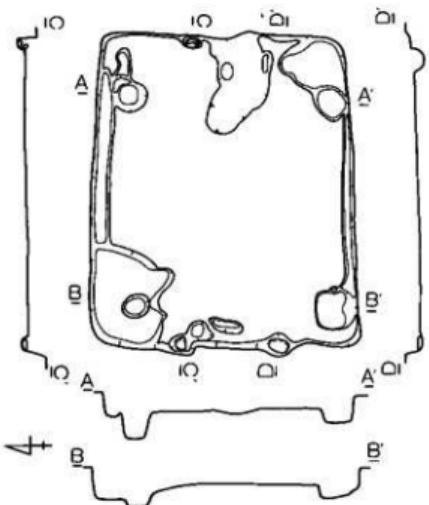
第55号住居址実測図(1:120)

第55号住居址の構造

カマド両脇のP₁・P₂および床中央のP₃・P₄を主柱穴とし、P₅～P₁₄まで壁際に4つづつ補助柱穴がなる。他のビットはいずれも浅く、柱穴とみなし難い。P₉・P₁₀より僅かに内側のビットは入口部施設に判う可能性がある。カマドは西壁中央にあり、やや張り出す。床は全般的に堅いが、特に主柱穴に囲まれる一帯が非常に堅緻になっている。床に掘られた小溝は、簡仕切り施設または板張り床の存在を暗示させる。カマド内の他に床上4カ所に焼土がある。



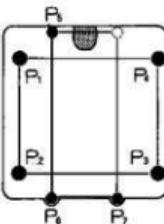
柱穴配置模式図



第110号住居址実測図(1:120)

第110号住居址の構造

大形のビットP₁～P₄が配置からみて主柱穴と考えられる。P₅・P₆が盤面下であるのに対しP₁・P₂は若干内側へずれる。この他にカマドの脇とその対辺にやや壁外へ張り出るよう、内部に平らな石をもつ浅いビット(P₅～P₁₄)があり、底板(礎石)を育す柱穴である可能性がある。底溝は北・南壁下にのみみられる。P₅・P₇周内側の小溝は入口部施設であろうか。本址は褐色土中に埋り込まれているため、床はロームを貼って堅緻に叩き固めている。北西と南東の隅には浅く大きな溝がある。



柱穴配置模式図

松本市周辺の遺跡では、奈良時代から平安時代にかけて堅穴住居址の柱穴が無くなる現象が顕著である。本遺跡においても柱穴が存在する住居址は後述のとおり130棟のうち8棟のみで、ここに示した2例はむしろ特異なものといえる。その柱穴配列も、4本の主柱穴が住居址コーナー部から等距離の床上に方形配列をせず、古墳時代からの伝統的な型は第43号住居址のみで、他のほとんどは第55号住居址の様な、カマドの両側ないしはその対辺の盤際と床中央部にあって長方形の配列をなすものとなる。第10・58号住居址の様に、著しいものでは盤際柱穴が外部へ張り出す。この現象の背景については、住居内から可能な限り柱穴(即ち柱)を少なくする意図があつたと考えられるが、比較的大形の住居にのみ柱穴が残るとはカリもいえず、上屋構造の変化も考慮される。

遺構と集落

遺構は調査地のほぼ全域に広がっているが、東西方向に調査地を貫する溝2~4により区画され、溝3以北に竪穴住居址が、まだ以前には掘立柱建物址が集中している。

竪穴住居址はいずれも楕円形の平面形で、規模は一辺約2~7mと格差が著しい。どの住居も東西方向に主軸をそろえ、雁はほとんどが西または東壁に設けられており、北壁のもののが少數見られるが南壁にある例は皆無である。柱穴をもつ住居は、第10-16・43-50・55-99-110号の8軒にすぎない。このなかで平面規模の突出して大きい第50-55-99号の3軒は各面壁下に4本づつの補助柱穴が配される。

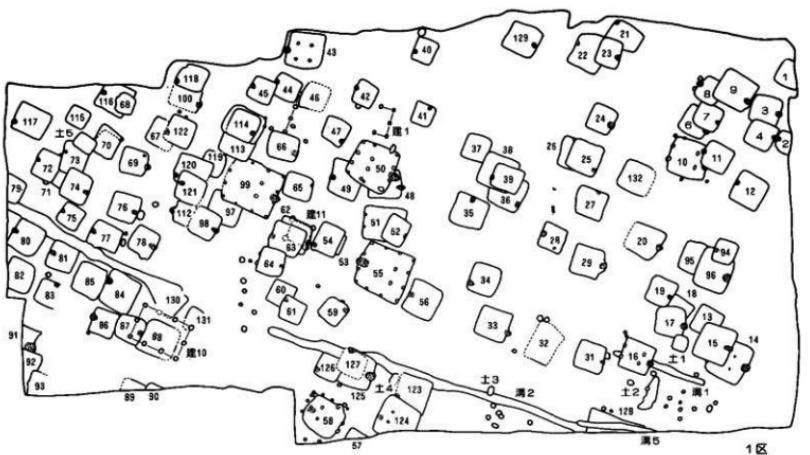
10棟発見された掘立柱建物址は、竪穴住居址と同様に主軸は東西方向を指す。第5・9号が2×2間の船形式、第2・3・6・7・8-10号が倒柱式で桁行3間、梁行2間のものが多い。第6・7号は片舟の梁行に平行して1列ないし2列の柱孔をもつ。

5本の溝址はいずれも正規に東西を示しており、人為的な遺構であることがわかる。溝2・4の下層は砂性が強く用水路と推定される。溝2が調査地西部で一旦とされるのは後世の削平によるもので、本来は通じていたのであろう。

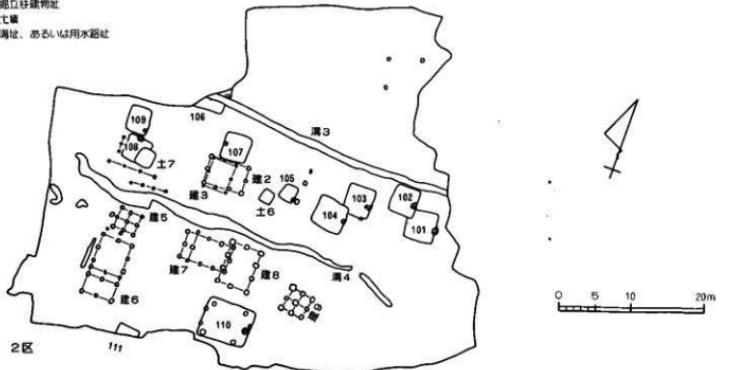
集落全体で見ると、溝址を構にして竪穴住居群と掘立柱建物址群が分かれることは先述のとおりだが、さらに竪穴住居址群の配置を見ると、調査地中央部以東は不規則に点在または集中・重複するのに対し、西側は僅かな箇所でもちながら隣接するよう並んでいる。そしてこの双方の中間に第50・55・99号の3軒の大形の住居が存在し、性格の異なる東西の住居址群を束ねて本集落の中心をなす觀がある。ただし土器の分析によると、竪穴住居址群の席地は、時期的にはおよそ3期間に段階づけられる。このため、密度に見るところ時期に存続した住居は総数の1/3以下で、また中央の3軒の大形住居址も、同時に併存ではなく1軒の3段階の変遷と捉える方が妥当であろう。溝2も重複する住居址にはすべて切られてあり、古い時期の住居址群に伴うものと考える。

集落は今回の調査地の範囲より広がっていることは明らかで、遺構の分布密度や溝址のあり方からみて主に西方および東方へ延びていくものと推定される。

溝3の北端一帯に遺構の空白地があるのは、溝2の中断部分と同様に後世の削平によるものである。



数字のみは竪穴住居址
「建」は掘立柱建物址
「土」は土塁
「溝」は溝址、あるいは用水路址



0 5 10 20m

土器・陶器

各種の遺構から多量に出土したが、代表的な器種に限って説明したい。
土師器 出土土器の主体をなす。台のない杯(1・7)、台付きの碗(2・3・6)、台のない皿(4)、台付きの皿(5)、小形の甕(8)、肩の長い甕(9:下部欠損)などがある。1~3の内面は炭素を吸着させて黒色にしてある。

須恵器 古い時期の遺構から出土するが量は少ない。台のない盆(11・12)がほとんどで、蓋(10)は非常に珍しい。また小~大形の甕(13)がある。

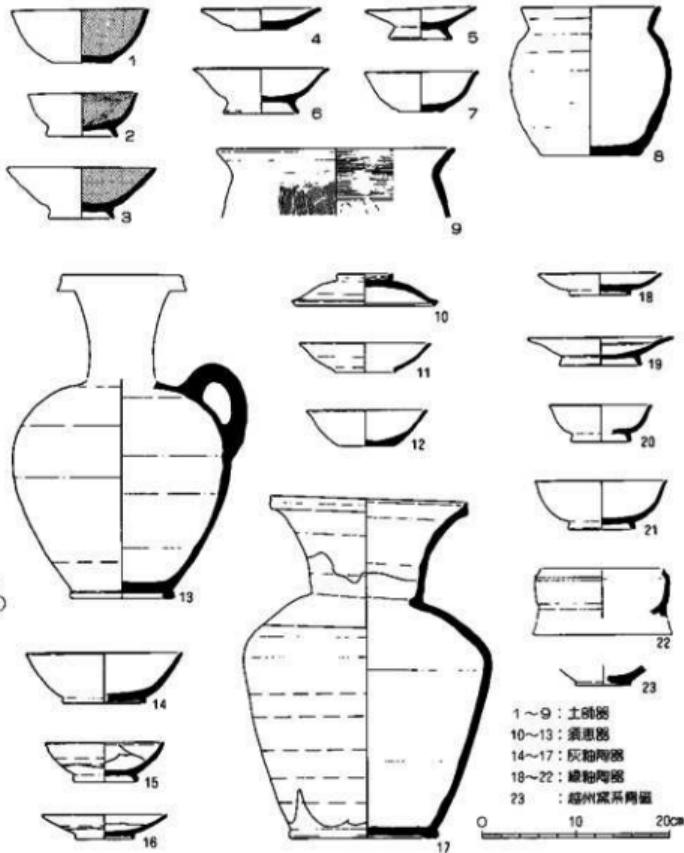
灰釉陶器 土師器とともに出土するが量はあまり多くない。食器類が中心で、甕(14・15)、皿(16)がある。各種の瓶類も少數ではあるが見られる(17:大形の広口瓶)。

縁釉陶器 出土量は総数で約150片と他の種別に比べてきわめて少ないが、松本市周辺の同時期の遺跡のなかでは驚くべき多さである。器形の復元できるものもあり、ここでは皿(18)、段皿(19)、大小の甕(20・21)、合子(22)の5点を図示した。

青磁 越州窯系の青磁1点のみ出土している(23)。蛇の目高台をもつ碗の破片である。

墨書き土器

土師器や須恵器、まれに灰釉陶器に墨で字や記号が描かれている。第55号住居址では王、第110号住居址では安の字が多い。特に王は30軒近くの住居址から出土している。



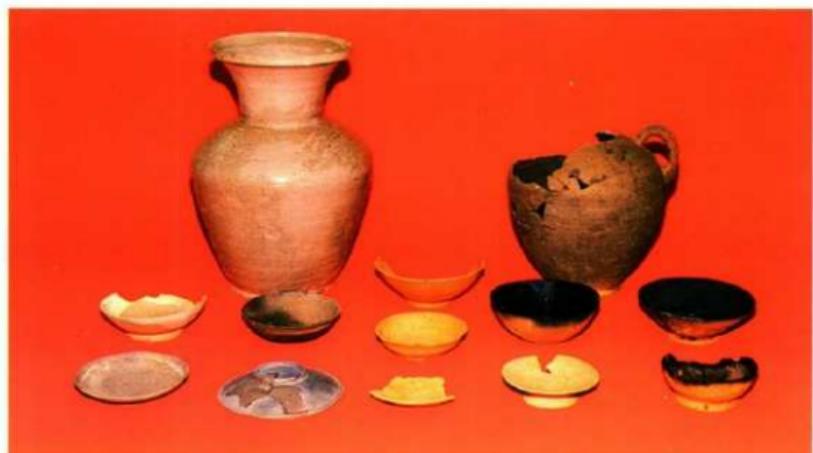
1~9: 土師器
10~13: 須恵器
14~17: 灰釉陶器
18~22: 縁釉陶器
23: 越州窯系青磁

0 10 20cm

王 3 王 4 王 5 王 6 王 7
 王 8 王 9 王 10 王 11 主 12
 王 13 王 14 古 15 宮 16 宮 17
 口 18 良 19 作 20
 月 21 茄 23 肝 25 𩫑 27 𩫑 29
 安 22 ト 24 日 26 𩫑 28

1・2は墨書きのある土器の実物図。他は墨書き部分のみの集成。

1は第18号、2は第23号、3~20は第55号、21~29は第110号の各住居址出土。



左端例：反輪陶器碗・皿
二例目：須磨窯碗・蓋
中央例：土師器碗・杓
右二例：土師器皿・内側焼
・外
後一例：反輪陶器碗・口瓶・
泊窯茶壺



前例：綠釉陶器皿
後例：綠釉陶器碗
右例：越州窑青瓷碗



各種の墨書き写真

銅印

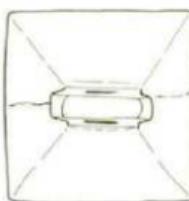
第22号住居址の北西極際で床面よりやや上ったところから単糸出土した。錫銅製で3.32×3.22cm、高さ2.78cm、重さは52.15gである。印面は方形で四周にはやや巾広の筋がめぐり、印文は2行で、一行に「2字ずつ」長良「私印」と讀あらわされている。書体は楷書風のしっかりした文字で、文字の深さは3.2mmあり、基部には朱の付着がみられる。鉛は蒸母有孔で、印上面には物型の合せ目の跡跡が継ぎ残っているが、文字上側は太目の痕になつていている。調査は良好な保存状態も良好である。材質については蛍光X線分析の結果によれば、主成分銅の量に対して錫と鉛の量が多いことが判つている。(奈良國立文化財研究所、田中正昭氏測定)

県内における大和古印は、既に重要文化財に指定されている藤原大社下社の「貴神祝印」(めがみほうりいん)(丘・大同庄櫻平城天皇下翻)と、明和3年(1766)に出土したという佐久の「物部猪丸」(もののべししまる)があり、今回出土の「長良私印」(ながよししゃいん)は3点目である。私印は奈良時代後半から使用されたとされ、その用途・機能として、自己の権利・所有の表示、附隨的・進階的な意味、封印、主体・權威・職務を確認するための証印などがある。本印についても役所等に提出する文書に使用されたのではないかと思われるが、確証はない。

「長良」については人名とすることは妥当であるとしても、それが姓と名の一字づつか、あるいは姓名のそれぞれ2文字とも考えられるが、ここでは名の2文字を示すものと考えたい。「長良」は藤原長良(孫政閑白藤原基經の実父)が実在するが、長良は又徳天皇に待しき權中納言である。時代的には同一住居址内出土の遺物からみると、9世紀中・後半に充てられるので合致するが、果してこの印が実際に本道跡で用いられたものかについては不明である。

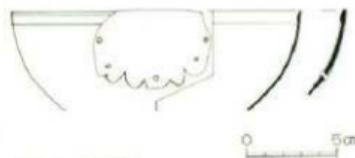
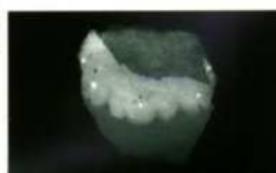
註 (1) 木内武馬「印章」新考古学講座ア「古史文化(下)」雄山閣 昭和46年

(2) 都城廬理文化財センター 岩瀬正氏教示



銅鏡(佐波理鏡)

第69号住居址を切るビット内より検出されたもので6片になっているが、同一個体と思われる。やや歪むが口径16.0cmを測る。裏面は1mm弱と薄く、口縁内側が僅かに厚い。外側には口縁に2本と3本の二組の線がめぐらされている。底部近くと想われる破片にも同様な流線がめぐらされている。市内で銅鏡を出土した遺跡は他に島立南東・神林下遺跡があり、南東遺跡からはほぼ完形品が出土している。これら銅鏡は仏器として使用されたものと考えられている。



参考写真(南東出土品)

銅鏡復元実測図

口縁部破片のなかには上図のように補修痕をもつ破片がある。レントゲン写真で見ると欠陥部を図のように鋼板を表面に折り曲げ、その端部を花瓶状に切ってちが所に隙2~3mmほどの鏡でとめている。なお補修時の穴の穴が、2倍の細い穴があいてしまっているのもわかる。鏡鏡に補修痕を残す例としては志良村の横井庵寺出土のものがある。

八棱鏡

第55号住居址より出土したもので、火熱で一部が溶けているが、径8.6cm、厚さ1.5mm、重量54.9gである。縁は蒲鉾式の細縁で、細縁の単圓がめぐらし、円錐鉢の穴には紐が残っている。文様は瑞花双鳥文らしい。



銭貨

富寿神宝(上)は、第16号住居址の床面より出土した。皇朝十二銭の五番目で、初鋳は818年である。外縁の約1/4を欠き酸化が著しい。県内では数例の出土が知られている。他の1点は第55号住居址より出土した。銭種は不明である。



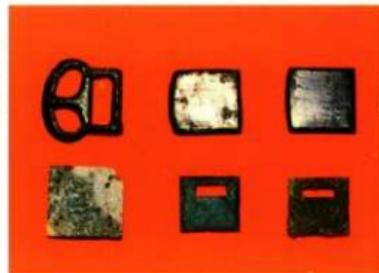
帯飾り(鉢)

銅製と石製がある。銅製は止め金具(鉢具)は第43号住居址、方形の3cmのものは第16、126号住居址、近方の3.7×3.5cm大のもの2個と石製のものは第110号住居址から出土している。特に近方の一つは裏金を6本の留金でかしみてあり、他の一つは留金が折れた後、3カ所に穴を開けて留め直したものである。石製のものは大理石製で3.9×3.7cm大で、裏面四隅に2個一対の穴を開け、そこに銅線を通してベルトに留めたもので、針金が残っている。

鉢具(かこ:止め金具)



留金具着装状態模式図



鉄器

今回の調査で出土した鉄製品のうち種別の判つたものは釘・刀子・鉄鍔・鎌・紡錘車・皮はぎ・鉄斧がある。釘・刀子の類が多い。釘はほとんどが少片だが、丸釘・角釘が認められた。鉄鍔は平根鍔・雁股鍔の2種がある。鎌は破片のみの出土であるが、地が薄く、端部は折り返しがされている。写真は、紡錘車(上)、鉄斧(左)、鉄鍔(中)、麻皮剥(右)。

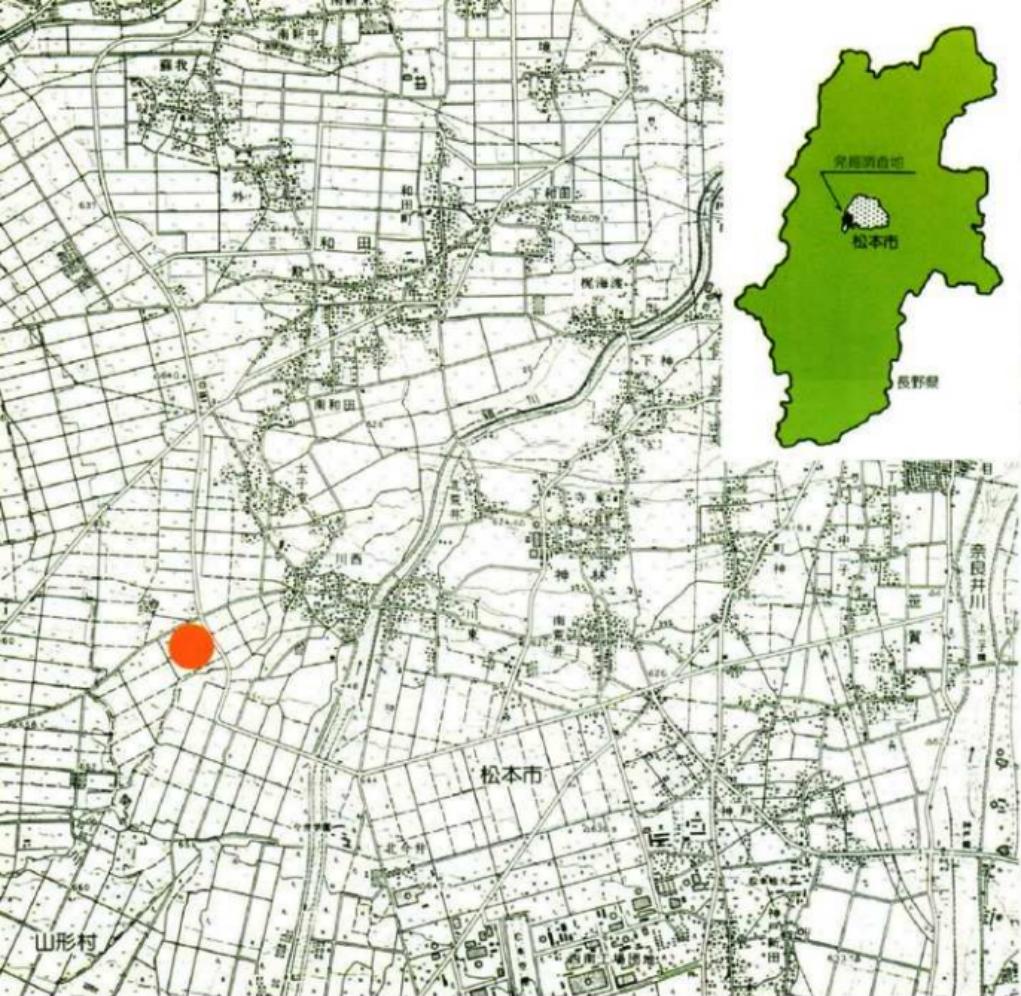


あとがき

昭和62年度に行なった本遺跡調査では130軒にあわる住居址と、あひだらしい遺物の出土をみた。その中には既述のように、鏡印・鏡鏡・鉢帶・八棱鏡・皇朝十二銭等の青銅製品や、多量の綠釉陶器・墨書き土器等が含まれてあり、松本市周辺の同期の遺跡と比べて卓越した遺跡であると言える。

この三間坪川左岸遺跡は、過去の構造改善事業の際にも多量の遺構や遺物が検出されており、更に今回の調査結果を見るに及んで本遺跡の規模の大きさを感じるものである。(昭和63年度調査でも140軒余の住居址等を検出した。)このことは莊園制下における村落の様相解明に大きな示唆を与えるものである。

調査に当つては市商工部をはじめ関係機関のご理解・ご協力があつた。記して謝意を表する。なお本報告書は遺跡・遺物の重要性に鑑み、早期公表との見地から概報として扱つた。なお、遺物・図書類は松本市立考古博物館に保管してあるので、ご活用願いたい。



発掘調査地

100 200 300 400 500

遺跡名 三間沢川左岸遺跡

遺跡台帳No 松本市64-326

(長野県市町村別遺跡一覧表)

松本市273 (長野県史番号)

調査地 長野県松本市大字和田字南西原7440番地

調査期間 昭和62年5月26日から7月25日

調査原因 暗空工業団地造成に伴う緊急発掘調査

調査主体 松本市教育委員会

三間沢川左岸遺跡(1)

平安時代集落の緊急発掘調査概報

昭和63年10月31日発行

発行 松本市教育委員会

〒390 松本市丸の内3-7

TEL 0263(34)3000

印刷 中山凸版印刷株式会社